

# えどがわ 江戸川

江戸川区の東の端、千葉県との境を流れる「江戸川」は、区名の由来にもなっており、江戸川区にとってもっともゆかりの深い川といえます。

江戸川はその昔、太日河ふといがわとよばれ、渡良瀬川わたらせがわの水が流れていました。

江戸時代の初期、利根川水系の改修が江戸幕府によっておこなわれ、利根川東遷事業とうせん（東京湾に流れていた利根川を銚子へ流路を変更する）の一環として、寛永年間かんえい（1624～1644）に関宿せきやどから金杉（野田市）のあいだに新たな流路を掘り、金杉で太日河につなげました。その目的は、洪水の防止、新田開発しんでんのための用水確保などもありましたが、もっとも重視されたのは安定した水上輸送路の確保でした。

それ以来、利根川からの水が流れ、現在の江戸川の原型ができあがりました。そしてこの川が、江戸へつながる川として「江戸川」とよばれるようになりました。

天明3年てんめい（1783）に浅間山あさまやまが噴火し、その噴出物が利根川水系の河床かしょうを上昇させたため洪水を招くようになり、天保年間てんぼう（1830～43）に関宿の江戸川流頭りゅうとうに棒出し（丸太を数千本川底へ打ち込むことにより川幅を狭める）を設け、江戸川への水の流入量を制限しています。

明治時代になっても、河床上昇による洪水の常襲じょうしゅうは改善されていませんでした。



利根川から江戸川へ分流する関宿付近

明治29年に河川法が制定され、主要河川の治水工事が政府によって行われることになりました。この頃には鉄道輸送網も発達し、水上輸送の必要性が低下してきたため、洪水防止を主目的とする工事方法に変わっていました。

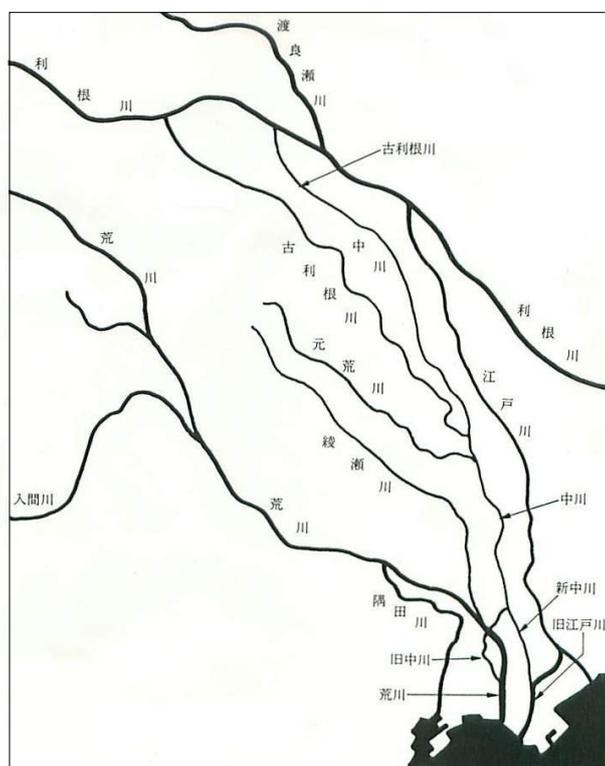
明治43年(1910)、利根川水系に大きな洪水があり、江戸川への水の流量増大を目的とする江戸川改修工事が大正3年(1914)に着工されました。

また、大正5年(1916)に着工した行徳村をつらぬく新たな開削は大正9年(1920)に竣工し、これを「江戸川放水路」、また篠崎から下流の旧流路を「旧江戸川」とよぶようになりました。

昭和2年(1927)に利根川との分流点、関宿に水門・閘門が設置されました。閘門とは、水位の異なる河川や水路の間を、船を上下させて通らせるための装置のことです。

篠崎水門として親しまれている江戸川水門と閘門は、昭和11年(1936)に着工、同18年(1943)に完成しています。

現在の江戸川の堤防は、昭和47年(1972)に工事が終了しました。江戸川水門も老朽化が進んだため、昭和45年(1970)から47年(1972)にかけて改築されています。



利根川水系と江戸川

## 江戸川区郷土資料室

〒132-0031 東京都江戸川区松島 1-38-1 グリーンパレス 3階  
TEL : 03-5662-7176 (9:00~17:00)